1996（平成8）年5月1日　兵庫県出石郡出石町内町　勝林寺

勝林寺寺報

共にこれ凡夫

ご開山親鸞聖人にとって、聖徳太子さまは、生涯こころの父母でありました。

年若い19歳の親鸞さまが、聖徳太子のご廟所（お墓）に籠もり、「いのちをかけて仏道を求めよ」とのお告げをうけ、これが求道の旅の出発となったと伝えます。

また、青春の苦悩の中から、真実の友を探し、師をもとめ、教えを捜し求める29歳の親鸞様に、「法然上人のおすすめになるお念佛をお聞きなさい、わたしはあなたの伴侶、妻となり、お念佛の友となって、お浄土のかなたまで導きましょう」とお教えくださったのも観音さまと現れくださった聖徳太子であったと申します。

また、都を遠く関東の地に、当時世間一般からは「石・瓦・つぶてのごとくなる」下人・悪人とののしられた人々と共にお念佛を喜び伝えていかれた親鸞様は、聖徳太子さまをおまつりする各地の太子堂を中心に伝道教化なさったと申します。

おそらく、その昔、聖徳太子さまが身をもってお示しくださった道を、親鸞様は、あたかも父母のおしえとして仰ぎ実践なさったのでありましょう。

その聖徳太子さまのおしえとは

「ともにこれ凡夫」。

身分や学識を誇り、人を差別してはならない。だれもが同じ凡夫として、如来さまのみ教えによって照らされ正されて生きようではないか。

「世間はうそいつわり」、ただほとけのみ教えに生きてこそ、身は虚仮、形は在家ながら、真実に照らされて生きる真の菩薩の道なのだ。

「世間虚仮　唯仏是真」

ちちははと仰ぎ慕い、そのおしえのままに、愚禿凡夫の生涯を生きぬかれた親鸞様は、晩年、太子さまをたたえる和讃をかずかずつくって、そのご恩を奉讃なさっておられます。

そのうちの一首

大慈救世聖徳皇
父のごとくにおわします
大悲救世観世音
母のごとくにおわします

四月十日は、聖徳太子のご命日でした。

第十期『連研』始まる

一期二年間12回の出石組連研は、期を重ねて九期を終了しました。

九期の修了式が7月7日ご本山で行われます。

出石組では、10期終了時（平成九年度）を以て、従来の『連研』のくぎりをつけ、蓮如さまのご遠忌（平成10年度）からニュー連研を出発させたいとしています。

一応、最終連研が五月十二日（日）～勝林寺会場で～出発します。

勝林寺からは五名が参加します。

葬儀

四月十四日　榎見
木村　勇　様

初参式

三月三〇日、大石　智ちゃん（昨年十二月生まれ）が初参りしてくれました。

但東町市場。

おじいちゃん大石正和氏、父英明さん、母すなおさんと、お兄ちゃん淳ちゃん、ご一緒に。

そのお元気な男らしい顔を見ていると、つい次ぎ願いを歌いたくなりました。

ほんとうに即興ですが、初参式のお祝いに。世を　おおいし　長（おさ）とる人は
学びて飽きず
なお励みてぞ
一番となる

（天下を支配した統率者というものは、飽きることなく学びに学んだそのうえにも、生涯励み努力して、かくて一番の者となったのです。努力勉励してください。）

大石　智（さとる）　英明　すなお
市場

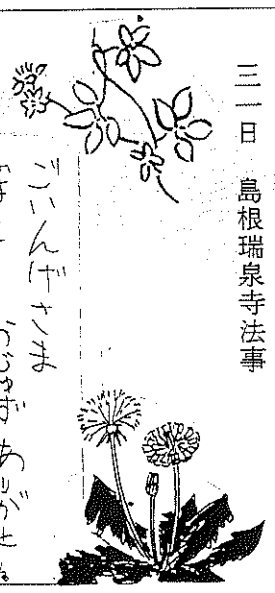
を読み込んだつもりです。

五月のこよみ

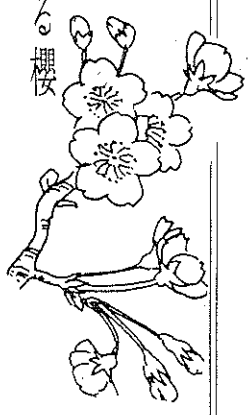
一日　専福寺前坊守法事
同寺永代経法要
二日　同寺永代経法要
横山吉一氏宅法事
木村和則氏宅忌明
三日　大阪数森氏宅墓参
数森一男氏宅法事
四日　森戸義則氏卓法事
五日　数森幸枝氏宅法事
六日　兼井元三郎氏宅祥月
七日　神戸北川浩氏宅法事
八日　兵庫教区教務所会議
十日　玉日会定例法座
十二日　出石組

第十期『連研』（会場　勝林寺）

十四日　講師養成中央実習
←（大谷本廟）
十七日　講師養成中央実習
十六日　十六夜会定例法座
十八日　出石組組内会
十九日　山田花子氏宅法事
二一日　宗祖降誕会（ごうたんえ）
二五日　玉井啓介氏宅法事
二六日　岸下正美氏宅法事
三一日　みのりを聞く会定例法座
島根瑞泉寺法事



散る櫻



今年の櫻は割合花持ちがよくて、春先長い間、爛漫のいろを楽しませてくれました。

ところが人間って、なんて勝手ないやらしい生き物なんでしょうね。その櫻が今度散りはじめると、たちまち憎しみいらだちの心に変わってしまうのです。

日に2回3回、掃いても掃いても庭一杯に散り敷いてしまいます。春の雨でも降ろうものならなおさら憎々しくなります。泥にへばりついた花びらは、ちょっとやそっとで掃くことはできません。

「なんていやらしいこと！」と、つい花のこずえをにらみつけたり致します。

そんなある朝、眼のご不自由なご主人と50過ぎの奥様とが、仲良く連れ立って散歩にきてくださいました。

奥様が申されます。

「本当にありがとうございました。この見事な櫻。豪華な春を満喫させてくれました。主人は眼が見えませんのに、こうして春になると待ち構えるようにしてここのお庭に行こうとさそいます。櫻の花が呼んでいるというのです。

わたしたち眼の明いてるものは、見える眼に頼り過ぎて、案外本当のものが見えないでいるのかもしれませんね。

わたしこのごろ物忘れがひどくなって、一日中捜し物に精出しているのですが、主人は何段目の引き出しにあるじゃーないかって、ちゃんと教えてくれるんですょ。

今朝も、もう散りかけましたからといいますと、

あの「いろはうた」のお釈迦様のご説法に、まのあたりお出合できるし、俺には死んだ母がよくいっていた、《散る櫻、残る櫻も、散る櫻》という　母の遺言のようなものも聞こえてくるんだ　というもんですから」

そばのご主人も丁寧なおじぎをなさって、

「本当に毎朝ありがとうございます。お掃除たいへんなのに」

とおっしゃってくださいました。

自分の都合だけで、褒めたり、なじったり、喜んだり憎んだり、それが私なんだと言うことが、この盲目のご主人から見抜かれてしまったような気がしました。

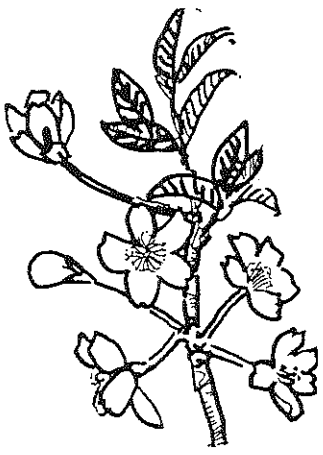
自然のおおきなおおきな教えのなかに居させていただいて居ながら、独りよがりの自分の眼だけを当てに生きて居るわたしが、何と愚かなことかと気づかせていただきました。

散る櫻　残る櫻も　散る櫻

色はにおえど　散りぬるを　我が世たれぞ　常ならん

こころでくりかえしながな今朝も庭を掃いております。

（出石町内の一主婦）



有為の奥山

三寒四温。晴雨・寒暖を繰り返し繰り返しながら、やっと四月にたどりつつきました。

その季節感からでしょうか、ふと思い浮かんだのが

有為の奥山きょう越えて

という例の「いろはうた」の一句です。

さっそく字引でしらべてみました。

「有為の奥山」の「有為」というのは、変化流動するもの、うつろいゆくもの、あてたよりにはならないもの、ということで、「いろはうた」のまえの方でいっている「いろはにほへど散り（塵）ぬるをわが世たれぞ常ならむ」とうたっている「諸行無常」の世の中のことだとわかりました。

この世の中には、何一つとして当てたよりになるものはないのに、しかし人間生きている以上、なにかを当てにし、なにかを頼りに思って暮らさなければならない。

財産をあてにし、親をたよりにし、また自分の健康や能力を信じて生きて行くのが人生というものでしょう。

ほんとうはあてたよりにならないものをあてたよりにして生きている人生。

あわい夢に酔いしれているような生き方。

蔦（つた）や葛（かずら）にからまれからみつかれる奥深い山道のように、いろいろな物や人とのしがらみにからみつかれ苦悩するこのわたしの人生。

それはいつかは、絶望にいきつかねばならないはず。

老いがおとずれ、死にいたれば、すべては無になってしまう。

「有為の奥山　今日こえて　浅き夢見じ　酔（え）いもせず」

ほんとうに、あてたよりとなるもの、そのようなものはないのか。

病んでも、老いても、そして死んでも、絶望するのでなく、希望・よろこびをもって老い死んでいける、ほんとうにあてたよりになるもの。

それを、明日といわず今日、今、さがしもとめなければ、とおしえているのが「いろはうた」。

要するにお釈迦様のおしえということでした。

四月八日は、お釈迦様のお誕生日だそうです。

復興へ
助け合う
佛の子
神明組　大屋　清義
兵庫教区門徒推進員連絡協議会

西池深音（弘道小2年）。西池希里（4/30満1歳の誕生日）。元気にお育ていただいています。